式　辞

今年は雪が多く、記憶に残る冬になりました。それでも、確実に春は訪れます。４月に入り、いよいよここ十勝も色鮮やかな春の賑わいを見せはじめています。

このような良き日に、帯広大谷短期大学第５７回入学式を、音更町議会議長・小野　信次様をはじめとして多くのご来賓、保護者の皆様の見守る中、挙行できますことは本学教職員にとりまして、誠に喜ばしいことと思っております。厚く御礼を申し上げます。

さて、ただいま名前を呼ばれました地域教養学科３４名、生活科学科栄養士課程１８名、社会福祉科子ども福祉専攻５４名、同介護福祉専攻２３名、総計１２９名の皆さん、ご入学おめでとうございます。

今、皆さんは希望と不安の真只中にいることと思います。新しい環境に入るということは、そんな気持ちと上手に付き合いながら、動き出していくということに他なりません。どうか、楽しいことや嬉しいことを中心に据えて、不安や緊張を、あえて、楽しみながら、これからの学生生活をスタートしてください。

さて、私は先の１月に行いました「プレ・カレッジ」の中で本学の「建学の精神」についてお話をしました。多くの皆さんはその場に参加し、私の話を聞いてくれたことと思います。繰り返しは避けますが、つまり、我々は今「奇跡のいのち」を生きているということ、だから可能な限り自分の都合で勝手に止めたりしないで、生きつづけていかなければならないこと。これらについて、両手両足を失ってもなお生き抜いた中村久子さんの人生や病と共存する境地に達した高校生・高間史絵さんの感動的な作文を一緒に確認しながら、

「いのちの尊厳」について体感してきたわけです。人は何かができたから立派でえらく、できないからダメである、といったレッテルを貼ってはいけない。物事を成果・結果で判断してはいけないのです。そこに至るまでのプロセスこそに意味があり、そこにこそ中村久子さんや高間史絵さんのような「輝けるいのち」の価値が有るのです。どうか、一人一人のこれからの2年間が、それぞれに価値が有る有意義で輝きに満ち溢れた時間になって欲しいと期待しております。

２０１２年に行われたリオ会議、これは地球環境の未来を全世界で議論するための会議でしたが、この中で２０１５年2月まで南米の小国ウルグアイで大統領をされていたホセ・ムヒカ氏がこんなことを語っていました。この演説はインターネット動画でも配信をされておりますし、「世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ」というタイトルの絵本にもなりました。ムヒカ大統領については、最近書物やテレビなどで特集も組まれ、ご存知の方も多いのでは、と思います。

昔の賢明な方々、エピクレオ、セネカやアイマラ民族などからの引用として「貧乏な人は少ししかものを持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」というのです。私たちの生活スタイルこそが問われるべきであり、環境危機などは問題の源ではない、というのが彼の発言の主旨でした。たしかに、日本においても、戦後において、とにかく幸せの尺度は経済成長であり、豊かさは常に《物質》と関わっていました。閉塞感に満ちた２１世紀の現代社会であっても、なおかつ私たちは「もの」を求め四苦八苦しているのではないでしょうか。

ムヒカ大統領は、発展が人類の幸福を阻害するものであってはならない、そう言うのです。自分たちにとって何が最大の幸福であり、そのために何ができるのか。それを考えていかなければならないのだと思います。発展自体が目的となることで、私たちの生活が不幸

になってはいけないということなのだと思います。

いずれにせよ、入学生の皆さんはこれから2年間という短い期間で自分にとって一番価値のあることを探す旅に出て欲しいと思っているのです。自分が幸せになり、結果他者も幸福になる。そんな夢や希望をもってこれからの2年間を過ごしてください。

保護者の皆様、本日は誠におめでとうございました。今日の学生諸君の誇らしい姿をご覧になり、ホッとされていることと存じます。しかし、彼らの道はまだ半ばです。これから楽しいことばかりでなく、辛いこと悲しいことをたくさん経験しながら学生諸君は成長し、情感溢れる豊かな大人になっていくのだろうと思います。

私どもも精一杯学生と共に泣き笑い、生活をしていくつもりでおりますが、至らぬところも多かろうと思います。何かございましたらぜひ、お声をかけてください。一緒に、この前途有望な若者たちを育てていきたいと願っております。

最後になりますが、本日ご参会頂きましたご来賓の皆様、保護者の皆様のご健勝とご発展、そしてこの１２９名の若者たちの前途に幸あらんことを心から祈念いたしまして、私の式辞とさせていただきます。

２０１６年４月２日

帯広大谷短期大学長

田中　厚一